

表象の広がり問い直す多彩な論点 ——ワークショップに向けて

文
窪田幸子

PROJECT

共同研究 ● 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に（2013-2016）

本共同研究は、国民国家に包摂されている先住民／少数者の「表象」をテーマとしている。人類学における表象研究は、すでにかかなりの蓄積がある。この共同研究であらためてこのテーマをとりあげるのには、先住民研究を行ってきた代表者が、その調査対象としてきたアボリジニなどについて、彼らがどのような場面でもどのように自己表象をし、また彼らについて主流社会によってどのように表象されるのかということが、現実的に彼らについてのイメージや情報を大きく左右してきており、また、彼らに影響をあたえているという素朴な実感を基礎としている。

アボリジニ絵画をめぐるポリティックス

アボリジニの場合、18世紀に始まる入植の初期から長きにわたって一貫して、「野蛮人」として表象されてきた。20世紀にはいっても、砂漠で、裸でブーメランや槍を持った姿が彼らの代表的なイメージであり、土産物にもその姿がプリントされた。20世紀後半、第二次世界大戦後になって彼らの法的立場は大きく変わり、平等な扱いを受けることになり、その後アボリジニへの対応は改善されてきた。しかし、主流社会におけるアボリジニについてのイメージの変化にもっとも大きな影響力を持ったのは、彼らとその歴史についての「表象」であったと筆者は考えている。

第二次世界大戦後、アボリジニの社会的権利が次第にみとめられていく中で、彼らの社会的排除、差別そして格差の問題は改善すべき重要な課題であり続けてきた。一方、アボリジニによる土地権主張も広がりを見せ、大きく注目をあつめた。そうした中、彼らの独自の土地との精神的紐帯のありかたは、主流社会によって映画や小説などで繰り返し表象された。また、



ケニア、モランの人々のビーズ販売。観光客の好みに合わせて、デザインや色遣いを変えて販売することもある（2003年2月、中村香子撮影）。

これまでの歴史的苦難、彼らの伝統と現在についても、主流メディアにおいて繰り返しとりあげられることとなり、それらがオーストラリア社会に対してあたえた影響は大きかったといえる。しかし中でも、アボリジニ絵画が持った影響力は何よりも大きかった。

アボリジニ絵画は1970年代に市場経済下で流通するようになった。彼らの絵画は、もともとは儀礼で描かれ、使われるもので、彼らの独自の神話世界、土

地との紐帯などが題材であった。アボリジニの市場経済への参入を助ける目的で、政府が積極的に後押しし、産業化が図られたのだが、1980年代になると、これらの絵画は海外において注目を集めるようになり、美術として高く評価されるようになった。そして、1990年代には、オークション会社がアボリジニ絵画をとりあげ、作品によっては1億円

をこえるような高値で取引されるようになり、アボリジニ・アート市場が成立することになった。この影響はとても大きかった。オーストラリア主流社会では、アボリジニ・アートへの関心と人気が高まり、それをとおして、彼らの文化への理解が広がり、「アボリジニ独自の神話的土地との強い紐帯」という理解が広く共有されることになったのである。

本共同研究では、「表象」は、文化的事象を作り上げるものと考えられる。スペルベル（2001）は、公共的表象と個人の心的表象の間には因果関係があり、感染（伝達）によって社会的表象が作られるとのべる。そして、それらの中で社会にとどまり続ける表象があり、これが文化的表象となるという。こうした表象の広がりをも具体的な事物の展開から考えていくとき、ジェルのアートネクサス理論における、一次的エージェントと二次的エージェントという視点も重要であろう。彼によれば、二次的エージェントである人工物は、エージェント性を拡散する存在であるとされる（Gell 1998）。表象されたモノが表象を伝染させる、そんな働き場面にもモノの持つエージェント性という視点を含めて考察することは、先住民／少数者がモノを介して表象するという場面の理解に有効であろう。

ワークショップに向けて

この共同研究を開始して1年半がすぎた。これまでにメンバーそれぞれの調査する先住民／少数者が、社会的歴史的な文脈で様々な主流社会によって表象され、彼ら自身が表象している場面に注目することを共通課題としてきた。これまでに、9回の共同研究会を開催し、メンバー各自のこれまでの調査にもとづく事例からの発表をし、全員の発表が一巡した。モ



ケニア、サンプルの少女。ビーズの首飾りは15キロ。頭飾りは造花。人々の装身具は年々派手になっている（2003年2月、中村香子撮影）。

ノによって表象し、表象されるという複雑で多様な場面において、どのようなことがおきているのか、この研究では、それを「表象のポリティクス」の多様性ととらえ、グローバルな動態の関係の中で、先住民／少数者と主流社会、国際社会との関係から、先住民／少数者の「生のリアリティ」に迫ろうとしてきたわけである。

その中からいくつかの興味深い論点が浮かび上がってきた。たとえば、制作される絵画や工芸品、布、衣装などの変化、経済的状況、それらが市場にのることによる影響、人々のイメージとして共有されるうえの問題、先住民／少数者のアイデンティティと表象の兼ねあい、などである。共同研究の次のステップとして、それらの論点を整理し、4回のワークショップを本年度の秋以降に開催する予定である。

まず1回目は、衣服、ファッションを中心テーマとする。民族衣装やアクセサリーなど、それぞれの地域に特徴的な身に着けるモノが自己表象として使われ、彼らのアイデンティティとなる一方で、それらが主流社会によって見出され、国家全体の代表的なイメージとして利用される事例は各地で見られる。また、主流社会による流用によって、新たな意味があたえられるような場面も見られた。そもそも、民族衣装の自己表象も一枚岩ではないこともわかってきた。たとえば中国では民族衣装自体に大きな変容が見られ、化学染料を使用した生地が増加している。材料の市場はグローバル化し、それがまた民族衣装を変化させている。「本物らしさ」は薄れているように見えるのだが、民族衣装をまとう人たちの意識は異なっている。彼らには外向きの表象ではなく、あくまで自分たちの衣装なのである。アフリカの装飾品やインドなどでも類似の展開が見られる。一方、たとえば台湾では、新しく作られた民族衣装によってアイデンティティを構築するといった動きもある。このように先住民／少数者自身の利用のありかたに変化があり、さらに主流社会による利用の変化があり、それらが相まって表象をうみだしている現実がある。身をかざるモノという表象に注目することで見えてくる社会の実像や、先住民／少数者の状況を明らかにしたいと考えている。

2つ目は、メディア、博物館展示などでの表象の問題を中心にとりあげる。両者とも、社会に対して大きな影響力を持つ表象である。そうした場で、どのようなモノが誰によって選ばれ、どのように提示されるのかはまさしく、表象のポリティクスであり、注目すべき重要なテーマである。表象される側との交渉という、近年になってとくに重要視されるようになった問題もここに含まれるであろう。ここでは、クリフォードのアート-カルチャーシステム(クリフォード2003)の再考についても議論に含められればと考えている。

3回目は、観光での表象をテーマとする。20世紀後半以降、観光は大衆化し、マスツーリズムの時代とよばれるようになった。1990年代にはいと欧米諸国だけでなく、他地域のさらに多くの人々が世界の隅々まで観光旅行をするようになり、各国は観光立国をめざしている。経済的に大きな利益をうむ可能性のあるものとして、どこの国においても重要視されるようになってきている。そして、そこでは先住民／少数者は、主流社会の注目を集め、盛んに活用される。観光の場面では彼らが「見られるもの」として「他者化」されることの問題性や、不適切な表象などがこれまでも指摘されてきた。その一方で、観光は彼らに多大な経済的利益をあたえるとい

う側面もある。エコツーリズムやグリーンツーリズムにおいて、彼らの文化が見直されることもあるという点も重要である。観光における表象という問題に切り込むことで、表象の持つ影響力という問題を考えたい。

さらに4回目では、表象と経済の問題をとりあげる。観光においても経済の要因が大きいことに触れたが、市場経済のもとで現金収入につながるような表象は大きな力を持つ。そのため彼らの社会にも、主流社会にも大きなインパクトをあたえる。冒頭に述べたアボリジニ絵画はまさにこうしたもののひとつの例といえる。経済的利益につながるからこそ先住民／少数者は注目され、利用され、時に搾取されることになる。そして、そこには「自然にちかい存在」であったり、「伝統的」であるというような表象もかさねられる。その結果、時には貧困を示す表象など格差を表すこともある。一方で、市場価値以外の価値を表象に見出すということもありうるだろう。経済に注目して考察することは、表象という問題をより広い社会的文脈において考えることを可能にする。



インド西部ラバーリーの男性。近年かれらの上衣に想を得たファッションが流行している(1998年、上羽陽子撮影)。

以上の4回のワークショップでは、共同研究会のメンバーの中で、それぞれのテーマに適切な4~5人ずつが発表する。この4回のワークショップの内容をクロスオーバーさせることが重要である。コメンテーターには、議論を展開することのできる研究蓄積のあるメンバーを選定する。そのうえで、全員での討論を行う。議論を踏まえて、各メンバーは自分の発表をさらに展開させる。最終的にこれらを取りまとめ、ワークショップを基礎として有機的に結びつけた4部構成の、表象研究に新しい一石を投じるような成果論文集につなげたいと考えている。

【参考文献】

- スベルベル, ダン 2001『表象は感染する—文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳 新曜社。
- Gell, Alfred 1998. *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford UK: Clarendon Press.
- クリフォード, ジェイムズ 2003『文化の窮状—二十世紀の民族誌、文学、芸術』(叢書・文化研究) 太田好信・慶田勝彦・清水展他訳 人文書院。

くぼた さちこ

神戸大学大学院国際文化学研究所教授。専門は文化人類学。オーストラリア・アボリジニ研究を中心として、先住民研究を行っている。著書に、『アボリジニ社会のジェンダー人類学』(世界思想社2005年)、『先住民とはだれか』(共編著 世界思想社2009年)など。